
デジモンクライシスストーリー ~ hazard monster's ~

エア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンクライシスストーリー { h a z a r d m o n s t e
r s }

【Nコード】

N 5 6 8 4 E

【作者名】

エア

【あらすじ】

別の世界？怪物？進化？そんなの信じらんないね。例えそんなのが存在しているとしても確認できないなら無いのと一緒に。でも目の前に広がるこの光景。確認できたんだ。信じずにはいられない。

一話・遭遇（前書き）

主人公：鞍馬シンジ 高校生

一話：遭遇

今から十年程前の話、

一匹の怪物がオレ達の世界に迷い込んだらしい。

そいつはオレ達の世界とはまた別の世界の生き物で、最初はちよい大きめの座布団程度の大きさだったけど進化とか言うのをして小さな恐竜になり、更に進化してデカイ恐竜になったらしい。

そいつは次に現れたデカイ鳥と闘って消えた。

その闘いを見た奴等が選ばれし子供になってヤバい状態だったあつちの世界を救ったらしい。

アナタはこの話どう思う？

いつも見ている動画共有サイトのマイホルダーにいつの間にか登録されていた動画を見てみるとこんな文章が表示されて終わった。

怪物？別の世界？進化？

そんなモノは信じらんないね。例えそいつ等が存在しても確かめる術がないし、その別の世界とやらも行けないのならないのと一緒に

だ。

画面にはYES or NO?の表記が映っている。

こんなのNOに決まってる。

「誰だよこんなバカげた動画上げたヤツはヒマならヒマでもっとクオリティー高いもの作れよな。」

だけど運命のイタズラ？

オレのマウスは反抗期。

何だかYESを押してしまった。吸い込まれるようにカーソルが動いたんだマジでさ。

画面のYESは嬉しそうに点滅しまくと消えちまった。

ついでにマイホルダーからも無くなってるし、勝手に登録されて勝手に消える何てなんかムカつく動画だったな。

ふと時計を見ると午前4時。

そろそろ寝るかと布団に潜った。

そして次の日

その日は朝から妙な日だった。

昨日の夜から降り始めた雨は明け方から強風も吹き始め台風のようになっていたが、オレが学校に行く時には雲一つない晴天になっていた。

昼間はそのまま晴天だったが、夜には暗雲立ち込め、雷が鳴り響い

ていた。

「ただいま」

マンションの10階、オレの声は誰もいない暗い家の中に消えていく。

「あれ？母さんいないのか？」いつもならそろそろ晩御飯が出来上がっているはずの時間に、家には誰一人としていねえ、曇った夕暮れの薄暗い光が僅かに照らすばかりだ。

なんだこの状況？

「サヤコ？」

妹の部屋をみたが、妹もいない。

「みんなどこいったんだ？」

ここで始めて家の電気をつけようとするが何回スイッチをいじっても電気がつかない、他にもテレビや冷蔵庫などありとあらゆる電化製品が使えないし、ブレイカーも落ちてない。

「おつかしいな、停電か？」

辺りの様子をみようとベランダに出てみると見渡す限り真っ暗で光といえば夕暮れ時に不思議に雷鳴轟く雲の隙間から覗く月明りだけだった。

「どうなってんだ？」

少し辺りを見渡していて異変にきずく。
人の気配がまるでしない。

隣りも、その隣りも誰の気配もない。

何か少し怖くなった。

誰かに電話しようとして取り出した携帯は圏外になったことがない自分の家で圏外になっていた。

しかもオレを嘲笑うかのようにブチンと電源まで切れる始末。

「そんな、マジ怖くなった……だれか、誰かいませんか？」

オレの呼びかけにこたえる者はなく、代わりに雷鳴ばかりがゴロゴロと響いている。

「ホントに誰もいないのか……？」

都会において自分以外の人間がいなくなる。有り得ない状況に段々と恐怖がパワーアップ。

いくら高校生でもちよつとくらいお化けも信じてるし、オレももしかして世にも奇妙な世界に来ちゃったか？

「うおっ!？」

目の前の民家の木に落雷が直撃した。

燃え落ちる木が倒れるのを合図とするように巨大な雷鳴と共に空に溜まっていた雷雲が物凄い勢いで渦状に回転し始めた。

巨大な雷雲の渦は圧縮するように次第に一つの巨大な球体となつてゆく。その形は卵を連想させる楕円形。

「何だよ…アレ？」

こうゆう現象に詳しい訳じゃないが、素人目から見ても明らかにおかしい、その膜放電を続ける雷雲の球は空中に留まると、くす玉の様に割れた。

中からいくつもの光がオレの住む街にさながら流星の様に降り注ぐ。

そのうちの2個が近くの公園へと舞落ちるのを見て、気になったオレはダサい制服のまま公園へと向かった。

公園に着くとそこには通常では有り得ない光景が広がっていた。まさに目を疑う状況。

本気で自分の体が心配になったのは初めてだ。

けして静かではないのに心臓の音がやたら大きく聴こえるぜ。

なんせそこにはぐったりと横たわる体の一部を機械にかえた謎の紅い竜と、それに銃口を向ける人型の黒い三ツ眼の男。

「はやく姫さんコッチに渡しちまえよ」でないと殺しちまうよ」な

あグランちゃんよ」

「例え・・命にかえても姫様を渡すことは出来ない」

「強情だな」さつさと渡せば楽になるのに、オマエの兄貴といいオマエといいメガログラウモンは皆こんななのか？」

紅い竜はボロボロの体を無理矢理起こし、背中のバーニアが火を噴きながら動き始めた。
さつきまでは分からなかったがどうやら腕の中に何かを持っているようだ。

「また逃げる気かよ」

不機嫌そうに三ツ眼の男が言う。「オレは完全体、オマエは究極体。勝ち目は低そうなんぞな」

「確かにそうだな、だが勝ち目が低いって事は逃げ切れる確率も低いってことだ。強者から逃げ切れる弱者は存在しない。
いい加減オレも飽きてきたし・・」

腰からもう一丁銃を出すと、銃口を紅い竜にむける。

「くたばれ」

二丁の銃のトリガーを同時に引いた。DOUBLE IMPACT
！！

二丁の銃から放たれたエネルギー弾を紙一重でかわすと紅い竜はオレが隠れている方へと突っ込んできた。

何であえてこつちに避けるか？

きっとそれも運命なんだろうな。

軽い悟りと凄まじい衝撃にオレは少しの間意識を失った。

「に・ん・ん」

何か声が聞こえる。

「・・・ん・げん！」

段々と意識が戻ってきた。

「ニンゲン！！」

ハッと意識を取り戻すとさっきの公園から10メートル程離れた駐車場にいた。公園はエネルギー弾の威力でクレーターの様になっている。

なんつー威力だ…

なんて事を考えていると、

「ニンゲン！！」

さっきも聞こえたバカデカイ声に振り向くとそこにはあの紅い竜がいた。

両腕に巨大なエッジを装備し、その体の中心、胴体は完全に機械化してる。

「ニンゲン！オレと契約しろ！」

「契・・・約？」

「そうだ！オレと、このグランと契約すると言え！早く！」

鬼気迫る顔&危機迫るオレの命。

お願い事をされてるのに喉元には頭くらい軽く跳ね飛ばしそうな巨大エッジ。

あまりの恐怖に言われるがまま何も考えずに叫んでしまった。

「オレは、このグランと契約します！！」

ピピピ　ピピピ　ピピピ

携帯の鳴る音、メールの着信がある。

差出人は不明。

「契約完了。」

突如オレのやつと買った最新機種の携帯が強い光を放ちながら形を変えた。

「なんだコレ！？オレの携帯が変わっちまった！！やつと最新機種手に入れたのに…」

「わめくなニンゲン。それはデジヴァイス。タイマーの証だ」

白いボディに赤のスプライトが入ったスライド式の携帯に似たデジヴァイスと呼ばれるもの、画面には見慣れない文字で何かが書いている。

あらゆる始まりは困難である

何故か読めた。

「礼をするぞ我がティマー、シンジ。オレの名はグラン。話しはまた後です、今は姫様を助けねばならん。早く乗れ！」

グランはオレが乗ったのを確認すると凄まじい勢いで飛び始めた。

しばらく行くと先程の三ツ眼の男が一台のバイクに乗って走っているのが見えた。

「見つけた」

グランはそのバイク目掛けて急降下。

こうゆう場合キヤーとかワーとか言ってるヤツは余裕があるやつで、本当に怖い時は声なんか出ない。ただひたすらに掴まってるだけだ。

「ん？アイツ生きていたのか」

どうやらコチラに気づいた男はバイクを片手で運転しながら銃口をこちらに向け、放った。

それを左腕で弾くとグラウは右腕の一撃をお返しのように男目掛けて振り下ろす。

大破するバイク。

しかし腕の先に男はおらず、かわりに一人の少女を抱えていた。

「あの一撃を弾くとは、グラウ、オマエ、ティマーと契約したな？人間のペットに成り下がるとはなあ、墜ちたもんだぜ」

そこに無傷の男が立っていた。

「黙れ！貴様を今、ここで、デリートする」

瞬間、男はいつの間にかグランの眼前にまで迫っていた。

「あまり強い言葉を吐くんじゃねえよ、出来もしない行動を言葉にするのは自分が弱いと吐露しているみたいだぜ？」

2体は睨み合ったまま一步も引かない。が、

突如、男の右アッパーがグラウにクリーンヒットし、余りの威力に数メートル吹き飛ばされた。

「まあ今日はいいや、なんか興も削がれちゃったし姫さんは預けとくは、じゃあな」

「くそ・・・！まで、待てベルゼブモン！」

地に伏せるグランを尻目にベルゼブモンが大破したバイクに手をかざすとバイクは瞬間的に修復され、そのままどこかに去っていった。

二話：あつちの世界の昔話

昔々・・

それは小さな島に舞降りた。

その日、ファイル島、はじまりの街に誕生したのはデジモンではなく明らかに人であつた。

銀色の髪に大きな紅い瞳、背丈は150程の小柄な少女。

少女は島のデジモン達により、

「サヤ」と名付けられた。

サヤには不思議な力があつた。

超能力と言つてもいい。

宙に浮き、未来を視る。その力の中でも特に異質だったのが物やデジモンを進化させる力。

デジモン達は始めてみるその力に敬意を表示、サヤは島の姫として君臨した。

サヤが玉座に君臨してから一月程たった頃、その小さな島の不思議な姫の噂は遠くフォルダ大陸にまで及び、その力を一目見ようと各地から様々なデジモンが島を訪れた。

サヤも良かれと次々にデジモン達を進化させていった。

しかし、問題が発生した。

成長期だった者が次の日には完全体にまで進化していたり、世界のパワーバランスが崩れ始めた。

この事態を重く見た島のデジモン達は姫に力を行使するのを止めさせた。

パワーバランスの崩壊は何とか抑えられたが、快く思わない者もいた。

そして、あの事件が起きた。

いつもと変わらない穏やかな日だった。

護衛を伴い島を散歩していた姫の前に一体のデジモンが現れたのだ。それは姫により進化した大陸の究極体デジモン。

平穏は壊された。

大陸の究極体デジモンがしたこと、それはさらなる力を手に入れる為の姫の誘拐。

大陸の究極体デジモンは護衛は勿論のこと、騒ぎを聞き付けた島のデジモン全てをデリートした。

それを間近で見ていたサヤ。

見知ったデジモンが次々に殺されていく様を見た。切り裂かれ、引きちぎられ、バラバラにされ、デリートされていく様を。

小さな体の小さな心は簡単に碎け散りその力は暴走した。

デジタルワールドに存在した小さな島から発生した膨大なエネルギーの波は世界を包み込み、全てのデジモンが完全体以上に進化するという異常事態が発生。

その結果、コンピュータネットワーク上にあるデジタルワールドのサーバーは容量オーバーを引き起こし、メインプログラムであるユグドラシルはデジタルワールドを再構築すべく全てのデジモン及び、デジタルワールドのデリートを決断した。

サヤの力はデジモンの進化と物質の進化。

サヤの力の暴走は忘れ去られた現世へのゲートの力を呼び覚まし、進化させた。

この頃デジタルワールドに残されたデジモンの数は約233体、その内現世に行くことができたデジモンの数は約100体。

そして島の生き残りであるメガログラウモン、グランは暴走のショックにより眠り続けているサヤと共にデジタルワールドを棄て、避難すべくこの現代世界にやってきた。

例えそこに、全ての元凶である大陸の究極体デジモンがいたとしても。

三話：紅い爪（前書き）

浅海 暁：高校生

パートナーデジモ

ン

ワールルモンのDD

三話：紅い爪

「信じられねえ話だな」

「しかし事実だ」

オレとグランは近くの体育館の中、身を潜めながら、これまでの経緯を話していた。

ハッキリ言って全く信用出来ない内容。だが不思議と混乱はなかった。

「デジタルワールドとデジモンの存在、そしてこの姫、こんなもん
がホントに存在するとはな」

「あまり、驚かないのだな」

超能力何か信じない。怪物何か信じない。だけど視てしまった。感じてしまった。

百聞は一見に如かず、

オレの適応力の高さは特技だな。もう疑いなんかなかった。感じまった以上、脳味噌はすんなり今までの常識を書き直す。

体育マットの上に寝転がってじっと上を見ていた。何だか汗臭い匂いが鼻をつく。

「まあな、じたばたしてもしょうがないだろ。それにしても姫様寝

たまんまだな」

視線の先、サヤは手を胸の上で組んだまま死んだように眠り続けている。

「姫様はあの事件のあとショックで一度も眼を醒まされていない。それ程酷かったのだろう。シンジももう寝るといい、これから何が起きるかわからんからな寝れる時に寝ておけ」

「ああ」

眠りについたシンジは、不思議な夢を見た。

そこには一人の紅い騎士と勝ち誇った様に笑うあのベルゼブモン。白い光に包まれ世界は…、そこで夢は終わる。

突然、爆音と共に眼を醒ました。体育館の外からするその音の正体を確かめようとオレが外に出ると、形は同じだが色の違う2体の空飛ぶ竜型のデジモンと、その2体を相手に防戦一方の2足歩行する狼のようなデジモンの姿がある。

しかもよく見ると狼型のデジモンの肩には見知った顔の人間が乗っていた。

「やい！ 暁なのか！？」

向こうもこちらに気がついたらしい。

「シンジ？ シンジか！？」

やはり狼型のデジモンの肩に乗っているのは、同じ中学校に行っていた浅海 暁だった。

中学ではよくつるんでたけど高校に入ってサッパリ遊ばなくなったヤツ。

皆にだっているだろそうゆう友達。

そんなありふれた関係だったヤツが今目の前にいる。

なんとか近づこうとするものの、上空にいる2体の攻撃は止むことなく降り続け、近づくこともできない。

（くそつ、全然近づけねえ。取りあえず空の2体を倒すか）

オレは体育館に向かって大声で叫んだ。

「グラーーーン!!!」

思ったよりも大分馬鹿デカイ声に自分でビックリ。

同時に一瞬場の空気が止まった。と、体育館の扉を突き破り、紅い竜、グランが現れた。

「何だシンジ!?!」

「なんだじゃねえよ、こんな爆音してんのによく寝てられるな」

「スマン、熟睡してて聞こえなかった」

グランの鋭い眼光が上空の2体に向く。

「オマエ等はメガドラモンにギガドラモンのオカマコンビじゃないか」

《そうゆうアンタはアタシ達のこと覚えててくれたのグランちゃん。
メガちゃん超〜うれし〜》

「姫を裏切った者を忘れる訳がないだろう」

「裏切った何て酷いこと言うわ〜私達はただコッチの方が有利かな
〜と思っただけ・・・よ!」

ギガドラモンの手からどこにそんなにミサイル入ってんだよとツツ
コミたくなるような大量のミサイルが発射された。

「これで木っ端微塵よ〜」

不意をつかれたグラウはその攻撃に一瞬反応が遅れる。

「クソ、間に合わん...!」

カイザーネイル!!

直撃する瞬間、赤い閃光と共に全てのミサイルが破壊された。

「今だグラウ!」

爆煙の中から二筋の翠色の閃光が爆煙を吹き飛ばすように発せられ、
それぞれがメガドラモンとギガドラモンに直撃する。

「やるなシンジ!」

「そつちもな! 暁、オマエもデジモン・・・」

《ちょーつとアンタ達！！》

二人の会話を引き裂くように、メガドラモンとギガドラモンが片方の手で被弾箇所を抑えながら同時にもう片方の手をこちらに向けてきた。

《まったくやるわね・・・》

「でもね、私達だって負けられないわ！アナタ達ハザードマークを背負うデジモンはこれから親方様が創る世界には不必要なゴミなんだから・・・」

グランが胸のマークに手をやるのが見えた。

ハザードマーク？なんだそれと横を見ると暁のデジモンの肩にも似たようなマークがある。

ハザード。

英語には詳しくないが確か災害とかの意味があつた気がする。何か嫌な胸騒ぎを覚えた。

《2体ともデリートしたげる！行くわよ！ギガちゃん！！》

「《LOVE SHOWER！！》」

メガドラモンとギガドラモンの両手から先程とは比べものにならないような量の大量のミサイルが二人の頭上から降り注ぐ。

ただでさえ曇つたような暗い空を埋め尽くすミサイルの軍勢。こんなことされたら普通は腹括るぜ。

「あんな数のミサイル防げるのかよ！？グラン！」

「流石にこれは・・・」

「暁のデジモンはどうか出来ないのかよ！」

「無理に決まっただろ！！」

結局雨のように降り注ぐ大量のミサイル。その破壊力は周辺の地形を変え、全ての物を焼き付くす程。

《死、死んだかしら・・・？》

「あれをくらって生きてる奴なんていないわよ」

爆煙が徐々に晴れていく。

その中から現れたのは球体の透明なバリアに身を包み、無傷のままのシンジ達であった。

そして、その中心には眠り続けていたはずのサヤの姿がある。

「《い、生きとる・・・！？》」

「姫様・・・ついに眼が醒めたのですね！？」

「グラン、今はあの者達を倒す方が先です」

「シンジ！俺達をアイツに向かって投げてくれ！確実にあのオカマ共ぶちのめしてくるからよぉー！！」

グランは大きく振りかぶると、気合い装填。大地を揺るがすような衝撃と共に暁達を投げ飛ばす。

「ちょっとどうするのメガちゃん！アイツ等ピンピンしてるわよ！」

《アンタが不甲斐ないからでしょー！アンタが何とかしなさいよ！》

「何だこの糞野郎がよお！俺のせいだっつつのか！？」

《何だ逆切れかコラ！！》

上空で喧嘩する2体に高速で接近する暁達、それに気付かないままの2体。

「お二人さん、どうせやられちまうんだからそんなに喧嘩しなさんな」

「《ああ！？》」

2体が振り向いた瞬間、暁のデジモンの爪が赤みを増していく。その光輝く紅爪が振り抜かれた。

ブラッディークロウ……！！

振り抜かれた紅い残像を追うように現れた巨大な二本爪。

「《え……？》」

「往生しな。お二人さん」

《「ぐあああああ！！」》

二人の体を巨大な二本爪が割れ、無数に別れた数え切れない爪が襲

い、その一撃の凄まじい威力にメガドラモンは右腕を、ギガドラモンは左腕と永遠に別れる事となった。

《い、一次退却よ・・》

2体の体は青白い光と共に消えていった。

「よくやった、D D。smartだ」

「私はいつでもsmartだ」

四話：ハザマの世界

「暁がいるとは驚いたぜ」

暁の髪は昔の短髪頭から肩まで伸びていて服装の汚れぐわいも加わりまるで何ヶ月も旅をしているような、妙な迫力を感じた。

「こっちの方が驚いたよ。こっちにとばされて2ヶ月。初めて会った人間がシンジなんてな」

「え！？2ヶ月？」

どうやらオレの見た感じの印象は当たっていたらしい。

それにしてもちよつと違和感を感じる。こっちにとばされたとはどうゆう事か？

「でも、こんな風におかしくなっちまったのは昨日だぜ？」

「なに言っただよシンジ。こっちにとばされたのは2ヶ月前の話だ。」

何故か食い違う。何故だろう？

「それは恐らく、」

コイツは暁のパートナーデジモン、ワーガルモンのDD。

グランよりは大分小型だが同じ完全体でかなりできるヤツだとグランは呟いていたな。

「暁と鞍馬氏の間に軽いタイムラグが生じているのだろう。私の記憶でも2ヶ月前に私がこの世界で暁に出会ったのは事実だし、その後にはゲートが開いて何かがこちらに來た様子もない。」

その後も続くDDの解説。

簡単に訳すと、実際にオレや暁がとばされたのは2ヶ月前だが、とばされる過程で受けたショックで昨日までオレは寝てたらしい。

この世界は認識されて初めて実態となる世界らしく、寝ていたオレには目覚めるまでの間世界は止まっていたらしい。

昨日の学校に行った記憶も空から多数の光が落ちてきた記憶も、とばされる前に見た記憶と目覚め後の記憶が偶然繋がったように見えただけで実際には、光が落ちてきてからグランと出会うまでには2ヶ月の期間があったらしい。

「つかとばされたって何？」
「やっとなんか聞いた最大の疑問。」

暁とDDついでにグランまでキョトンとした顔をしてコッチを見る。

「気づいてないのかシンジ？」

「なんだグランまで。どうゆう意味だよとばされたって」

グランはオレを担ぐと、街中を見渡せる高度へと飛び上がった。

「なんだよこれは…！？」

見渡す限りのオレの住み慣れた街。だが、その先、綺麗に街を縁取るよう、切り取られたように一定のラインから先にはただ、荒野が広がっていた。

「シンジ、オマエもオレもとばされて来たのさ。この狭間の世界に」

「狭間の世界？」

「ここはデジタルワールドと現実世界の狭間にある仮想空間。オマエは他の人々がいなくなっただと思っただけ、実際にいなくなっただけはオマエとこの街だ。オレ達も現世と思っただけ来てみればこのザマだ。姫様の力で復活した現世に行くマシンも完全ではなかったらしい。おかげでこんな中途半端な世界に投げ出されてしまった」

「ちょっと待て、只でさえ混乱してる頭がパンクしちゃうような現実だぜ。何か？つまりここは別の世界だと言っただけか？」

「そつゆう事だな」

「ハア、受け入れたくない現実だな。受け入れてるオレも何でこんなに適応力あるんだか」

抱える頭を少し上げて視線を向ければどこまでも荒野は広がっている。空に晴れ間はなく、街はあちらこちら破壊されてゴーストタウンとは正にこんな状態を言うのだろうと思った。

「そつ言えば姫様はどうしたん？」

「ああ、姫様ならあそこに」

グランが指差した方、姫様は崖のように切り立った場所に一人立ち尽くし、じっと何かを見つめている。

グランの話では相当酷い体験をしたらしい。その目は何を見て、何を感じているのか？

オレにはわからない事だけど、その儚げに立つ姿は争いを巻き起こす程の超能力を持つような女の子にはとても見えなかった。

姫もとい、サヤの近くに着陸したグランとオレ。
何も話し出せない雰囲気。

「グラン……」

最初に口を開いたのはサヤの方だった。

「沢山のデジモンが私のせいで死にました。」

「それは姫様の責任ではありません！」

「いいえ、全ては私の力が引き起こした事です。」

そのまままた黙りこくって場に漂う重苦しい空気に息が詰まりそう
だ。

「おゝいシンジ〜！」

何処からか暁の呼ぶ声が、

天の救いだ。ナイス暁！これでこの場から抜け出せるぜ

二人を残して暁のもとにそそくさに行く。

「これからどうするか話しておきたいんだが」

暁の話ではもうこの街には食糧があまり残っておらず、生き残る為にはあるかわからないが他の街に行くしかないそうだ。

「これ見てくれ」

そう言つて暁は腕につけた妙な時計を見せた。

「なんだその時計？」

「なんだってデジヴァイスじゃないか」

「それがデジヴァイス？オレのと全然違うな」

オレが差し出したデジヴァイスを見て暁も驚いている。

まあそれはいいから続きいくぞと暁はデジヴァイスを操作し始めた。そうして表示された地図。

どうやら周辺の地図らしい。

暁が倍率を下げていくと、遠く離れた場所に街を示すであろう記号がある。

「ここに行こうと思うんだけど」

わかったと言つてグランとサヤの方を見るとまだ崖で二人一瞬に黙

ったまんまだ。

「落ち込んでてもしょうがないんじゃない？」

グランはちょっと怪訝そうな顔でこっちを見てる。

「なにを言ってるシンジ！少しは姫様の気持ちも考えろ！」

「だってそうだろ？少なくとも、サヤを守って死んでいった奴らはそんな顔でいて欲しかった訳じゃない」

サヤのもとに行って顔をのぞき込むと目は潤み始め、顔も歪んで今にも泣きそうだ。こうやって見るとやっぱりただの女の子にしか見えないな。

「オマエの責任じゃない。笑えよサヤ。皆それを願っている」

「ホントに…？」

目からは涙がボロボロ流れ落ちている。

かがんで宥めるオレに抱きついて泣くサヤ。同時にオレの中に黒い物が生まれたのがわかった。

話にしか聞いてないが大陸の究極体デジモンとやらが許せないと思っ
った。

同じこのハザマの世界にいるなら絶対にブチのめしてやろうと思っ
た。

五話：鉄のデジモン達

「暑〜い…」

あれから3日。

住み慣れた土地を出て既にどれだけ歩いたかもわからないが程歩いた。

固く荒れた大地はどこまでも広がりオレ達はこの何の色気も無い中をただひたすらに進むのみの3日間。せっかく見つけ出してきた服もとつくにボロボロのボロボロ。

因みに今日の天気は夏時々夏。要するにメチャクチャ暑いのだ。

デジモン以外は照りつける日光対策にマントを頭から羽織っているからぱつと見盗賊にも見えるかもな

「暑〜い……」

「そんなに暑い暑い連呼されたらこつちまで暑くなんだろう」

「んな事言ってもよ。いつつくんだよマジに」

「この調子だと後2日はかかるかな」

「2日！？マジ気が重くなるわ。なあ〜グラウ、オマエの力で全員運んで飛べないのかよ」

「オレのバーニアで飛んでいくのは容易いが、如何せん腹が減った。目的地に何もなかった場合、エネルギーが枯渇して動けなくなってしまうかもしれないから。なるべく節約したいんだ」

ハアとため息をついて前を向く。広がる大地がこれほどまでに憎らしいとは思わなかったな。

「姫さま、大丈夫ですか？宜しければ私がお連れしても」

「大丈夫です。皆さん歩いてらっしゃるのに私だけ楽する訳にはいきませんから」

健気に頑張るサヤだが顔を見れば無理をしていることなんて簡単にわかった。
こんな如何にもお嬢様な体が何時間も耐えられる程あまい環境ではない。

いや、かくも自然は雄大だ。この広い荒野にしてみればオレもグラウもちつぽけな存在、何時までも耐えられる訳もないか。

「シンジ…オマエにロリコンの気があるとは残念だ」

「てめっ、暁何意味わかんないこと言ってんだ!？」

「さっきからサヤちゃんばっか見過ぎなんだよ」

「ロリ、コン？」

不思議そうな顔でサヤがこっちを見てる。

「サヤ嬢、ロリコンとは自分よりもかなり年下の少女が好きと言う、いわゆる一つの性癖で」

「DD意味を説明すんな!!」

サヤの死角に入るようにグランの影に暁を押し倒して拳を振りかぶる。

「いつちゃう？一発いつとく？ん？ん？どうする暁君？ん!？」

「ハハハ、悪かった。まさかB.Lだったとは、危なかったのはサヤちゃんじゃなくてオレだったのか」

ゴン！

鈍い音は荒野の音に紛れるでもなく響き渡る。

「いつて」

腫らした頬をさする暁の顔には反省の色がない。

まさかこんなふざけたヤツとは、

「ん？なんだアレ？」

DDの指差す方。グランの高い視点はそれが何であるか捉えたようだ。

「なんだあの線は？」

更に近づいてみてその正体が分かった。俺たちにはお馴染みの物だがグランやサヤは初めてみるようだ。

「なんでこんな所に線路？」

そこにはあったのは電車が走る為にある線路そのもの。

その線路の向こう側、古びた看板には立ち入り禁止の文字がデカデカと書いてある。

「立ち入り禁止ですか…では迂回しましょう」

真面目に辺りを見渡すサヤだが人間の肉眼ではその線路の終わりは到底見えるはずもなく、目的の街に行くには越えるしか道もない。暁のデジヴァイスによるとこの線路は目的の街を囲うように一周していてやはり線路を越えるしかないようだ。

「まあ関係ないっしょ」

オレが線路を普通に、ホント普通に渡ろうとした瞬間。目の前の地面がモリモリ盛り上がり中からデジモンが現れた。

全身の殆どを機械化したアンドロモンと呼ばれるデジモンだ。

「ここは立ち入り禁止だ早急に立ち去れ。」

「私たちはこの先にある街に行きたいんだ通してくれ」

DDが言うがアンドロモンには届かないらしく何度言ってもも帰れの連呼。

「ここから先は大王様の私有地。誰一人入る事は許されない」

小声で力づくで行くか相談したがやはりエネルギー残量のすくなさがネックだ。

「早く立ち去れ。私はここで一番優しいガードだ。もうすぐ来るぞ」

「なにが？」

「み、皆さん。この線路というの揺れてませんか？」

サヤに言われて初めて気づいたが確かに揺れてる。しかも段々と揺れは激しさを増していく。

「みんな、退け！」

暁の大声に全身が奇しくも線路の内側にその身を投げ出したと同時に地面を砕き、高らかに汽笛を鳴らし、新たなデジモンが現れた。

トゲトゲしい外装をしたグランドロコモン。

究極体だ。

線路に乗ったグランドロコモンの冷たい目がこちらを見た。
ベルゼブモン以来、の究極体。人間のオレでもわかる圧倒的戦闘力の差。

グランやDDも緊張を隠せない。

「ナデ、センロノウチガワニイル？アンドロモン、ナデコイツラハイル？」

「は、それはロコモン様がお越しになつたさいの反動で」

「オデノセイ？ゼンブオデノ、セイ？オデノ…セイ！？チガウ！オマエノセイ！アンドロモンノセイ！オデチガウチガウチガウチガウ、オマエノセイ…！！」

少なくとも、少なくとも今目の前で起きた事は俺の記憶の中で一番黒い出来事だった。

グランドロコモンの巨大なホイールが持ち上がった瞬間。

それを察知したDDはサヤのクビを最適の力で打ち気絶させた。

サヤがその後起きた事を見たらまた暴走するかもしれないと思ったのだろう。好判断だ。

耳に残るひしやげた音。

叩き潰されたアンドロモンの体からは血とも油ともとれない物が漏れ出し、残った体はホイールの回転に巻き上げられて宙を舞った。

「う、うおおおお！！」

「待て、シンジ…！」

ブチ切れて殴りかかるオレを暁が止めた。

でも止まらなかった。仲間じゃないのかよ？何でそんな事が出来る？アイツが何かしたか？

沢山の思いが浮かんでは積もり、何もわからなくなるくらいに、

「落ち着くんだシンジ、今暴ればアンドロモンの二の舞だ耐えるんだ。耐えろ…！！」

「オマエタチセンロノナカハイった。カエセナイイツショキテモラウ」

誰からともなくグランドロコモンの客車に乗り込む。

しばらく走り見えてきたのは、鉄の壁に囲まれた刑務所のような所。暁は一言呟いた。

「あれが目的の街だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5684e/>

デジモンクライシスストーリー ~ hazard monster's ~

2010年10月28日01時35分発行